



続 謙澄と進々々

題字 棚田看山

その5

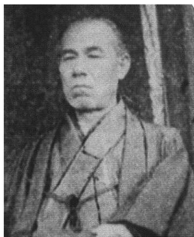
末松謙澄の父・房澄ふさずみ、通称七右衛門は文政二年（一八一九）十月二日、京都郡前田村で生まれた。

七右衛門はどのような人物だったのか。謙澄研究家の玉江彦太郎先生は、『青萍・末松謙澄の生涯』で「父・末松房澄のこと」として次のように記されている。

『父・房澄は通称を七右衛門、号を臥雲がしんといい、国学を修め和歌をたしなむ風雅人でもあった。十八歳のとき、前田村の庄屋になり、隣村、検地村の庄屋もかねた。その後、子供役（副大庄屋）をへて、久保手永の大庄屋、その後、黒田手永大庄屋にもなった。彼は剛毅の人として民政に腕をふるい、特に税制や会計事情に明るく、藩政時代には安政二年（一八五五）の会計方の改革、小倉県時代にも明治七年（一八七五）の地租改正に、民間人の代表として登用された。彼は積極的に農村の豊穰化、治山治水に取り組み、長峽川の改修、前田新地、文西新田の開発などは彼の残した事績である。』

また、昭和十四年に発行された『豊前人物志』（山崎有信著）には大庄屋としての彼の事績が次のように書かれている。

『常に意を公共事業に注ぎ、賑恤を施し、貯蓄を奨励し新田の経営、河川堤



父 末松七右衛門（その一）

防の改修、溜池の修造、その他、水路井堰に至るまで、細心に計画し、時に私財を投じてこれを行った。郡中の諸帳面吟味役を命ぜらるるや郡の会計法を改正し、郡の出米、即ち郡費節約する事八百石の大きに及び、年々郡民の負担を軽減するに至る。公共事業の著しきものを挙げれば、苅田新田、俗に文西新田と称す。自ら率先して新田開発の計画を立て、小倉藩主の許可を受け、文久元年の冬、工を起し慶応二年に至り五ヶ年間で竣工せり、その土地は苅田の東北に沿いたる海岸の干潟にして、その面積六十三町余あり。また、その用水のため、同時に井口池、面積およそ一町一反歩を築造せり。その工費七千四百円余、この経費も郡民に賦課負担せしむことを避け、手永費用を節約し、歳出の剰余をもって支出した。』

末松七右衛門が手掛けた文西新田は、苅田町の東北部にあたり、現在の国道一〇号線東側の苅田駅前から松山山麓までの広大な埋め立て地で、苅田が工業地帯となった礎となる大事業だった。井口池は、農業用水だけでなく、今は苅田町の水道用水も賄っている。

末松七右衛門の功績は今に生きている。

末松謙澄顕彰会 山内公二